

# アグリッパ王の前で

2023年6月11日

使徒の働き 25章23節～26章32節

序：新任の総督フェストウス（前任のフェリクスの置き土産＝パウロに関するユダヤ人の訴えの解決のため）着任早々多忙  
この問題はユダヤ人の宗教問題  
パウロには、ローマの法にふれる罪はないと判断（釈放？）

パウロはローマ市民権を持っている ∴裁判に不服があれば、皇帝に上訴できた  
ローマに行って上訴すると明言

総督は囚人パウロをローマに送るのはよいが、訴える理由があいまい  
皇帝に書き送る手紙のため、確かな情報を得なかった

表敬訪問におとづれたアグリッパ王（と妹であり愛人のベルニケ）に経緯を説明  
総督の思惑どおり、王は興味を示した 翌日パウロと謁見

フェストウスはこれは裁判ではなく、皇帝への上訴の申し立て書に書くための情報を  
得るための取り調べであると集まった人々に宣べ、アグリッパに進行委任

## I. パウロの弁明（王に向かって）

### (1) パウロの幸い

事の真相を説明できる

王がユダヤ人の慣習や問題に精通している（ローマ総督は×）

イエスの福音をそこにいる人々皆に伝える機会

### (2) パウロの履歴・生き方

同胞のユダヤ人にはよく知られている

正統派のユダヤ教徒（律法・慣習・歴史・伝統を重んじ、忠誠を尽くした）

パリサイ人として恥じない生活

神が父祖たちに与えた約束の望み＝死者の復活を信じることでさばかれている

ナザレ人イエスの名への嫌悪・憎しみ・異端と考えて反対（正義を実行と錯覚）

聖徒たちを迫害（逮捕、投獄、殺害に賛成）by祭司長から権限を与えられた

最初はエルサレム、やがて国外まで範囲は拡大

厳罰を科し、御名を強制的に汚させた、憎悪と怒りに燃えて

### (3) 復活のイエスに出会う（ダマスコ途上での劇的回心） cf. 9章、22章

真昼、天からの強烈な眩しい光にパウロと一行は照らされた（疑う余地なし）

地に倒れた イエスの顕現

とげのついた棒を蹴る（牛） キリストの道を蹴った（パウロ）⇒ 自傷行為

### (4) 召命①キリストの証人、奉仕者

#### ②ユダヤ人と異邦人へ派遣

#### ③神の救いの御業

目が開かれる（神、天上のこと、みことば） 視力

暗闇から光へ 光

サタン支配 ⇒ 神に立ち帰らせる

キリストを信じる信仰によって

罪のゆるし

永遠の嗣業にあずかる（他の聖なる者とされた人々とともに）

(5)回心～今まで

①天からの幻に背かなかった

宣教の範囲 = ユダヤの全地域～異邦人  
神に立ち帰った人たちが悔い改めにふさわしい生活をするよう導く  
大きい者にも小さい者にも差別せず接した  
旧約聖書とイエス・キリストの福音は預言と成就の関係

II. 総督と王の反応

(1)総督フェストウスは大声で証言を遮り、止めさせた

パウロは狂気 博学が原因  
自分に個人的決断を迫る真剣な問いかけと発展  
応答する準備がない

パウロ：自分は気が狂っていない、真面目な理にかなうことを話している

(2)アグリッパ王は、パウロの話していることを全部知っている、分かっている

パウロ：預言者たちを信じているか？と単刀直入に鋭い質問  
王は答えに窮す：わずかの時間で私を信者にしようとしている

パウロ：招きのことは＝聴いている人たち全員が私になること  
鎖は別として（落胆）  
説明不足ではない

二人とも言い訳して、個人的な応答を避けた（勇気・決断力がなかった）

III. 散会・退場

同じ結論：パウロには死刑や投獄に値する罪はない  
カエサルに上訴してなければ、釈放されたであろうに  
（もはや責任を問われることはない状況に身を置いてから述べた）

IV. 結び

(1)パウロの弁明の目的は釈放されることではない

彼の願いは、イエス・キリストの福音が常に前進すること  
ローマの総督たちとユダヤの王に、個人的な信仰の決断を迫った

(2)それは神の幻に背かず、使命を果たす中で成就してきた（人を恐れず、神を畏怖

(3)宣教者パウロと聴衆を分けるのは、キリストの復活信仰とそれゆえの希望の有無

(4)パウロの回心の証しは今回が3度目（いくつかは初めて聞く内容）：

(5)伝道者であるだけでなく、牧会者としての配慮も

(6)せっかくキリストの救いの間近まで来ながら、それを拒絶したアグリッパ王  
私たちの証しにたいしても同様のケースはある、残念な結果に失望するが、  
地上にいる間は、まだチャンスは残っている、できる限り伝えて、主に委ねよう  
何より大事なのは、とりなしの祈り